

「聴覚障害児の教育課程」

教育学部 立入 哉

1. 授業の目的

本講義は聴覚障害児教育の大枠を知り、もって特別支援学校、中でも聾学校教員としての資質を備えられることを目的とする。

聴覚障害児への教育法に関する知識と、聴覚障害児に特化した授業を考えることができる思考、また適切なコミュニケーションを行うことができる技能と表現、今後、聴覚障害児に携わろうと思える意欲と関心、さらに教員としての態度を獲得することを目標とする。

2. 授業の内容

授業は下記の流れと内容で実施した。

1. 聴覚障害教育の歴史
2. 聴覚障害児への教育方法の変遷
3. 聴覚障害教育の目的と制度
4. 聴覚障害児の教育 4. 早期発見
5. 聾学校教育の特徴 1
6. 聾学校教育の特徴 2
7. 早期発見
8. 早期補聴
9. 早期教育
10. 幼稚部の指導
11. 小学部の指導 1
12. 小学部の指導 2
13. 中学部・高等部の指導
14. 高等教育・生涯教育
15. 重複障害児の指導

3. 授業の進め方

1) プレゼンを中心とした講義

すべての回で約 24 枚のパワーポイントスライドを用意し、実際の授業ではそれらを詳述しながら進行させた。各講義の中で、最低でも 2 回の関

連するビデオ映像を利用した。ビデオ映像は事前に編集を行い、キーとなる場面のみを切り取った最長でも 10 分程度のビデオとして、視聴の時間が長くなりすぎないようにした。なお、スライドは A3 表裏の 1 枚に印刷して都度配布した。

2) プレゼンに埋め込まれた「調べ箇所」

プレゼンの中に、数カ所、復習の中で学生が自ら調べるテーマを提示した。授業の時間の中で話しきれない内容や、さらに調べて欲しい内容をスライド内に示した。

3) 小テストによる自己評価

毎回の講義内容について、授業の翌週に毎回、小テストを行った。学生にとっては酷であったかも知れないが、確実に実力が付く方法として、学生自身も納得して取り組んでいたように思える。小テストには、前回の学習事項に加えて、2) で述べた「調べ箇所」に関する問題も入れ、自主的な学習が評価できるよう配慮した。各小テストはその翌週、赤字で正解を上書きし、採点した状態で返却し、復習ができるよう配慮した。このことで、自分が十分に理解できていない箇所を学生自身がわかると同時に、授業者も学生の理解度を把握することができ、正答率が低い課題については再度、説明するなど小テストの意義が学生に伝わるように意識した。

4) 最終テストによる総合評価

16 回目に最終テストを行った。毎行行った小テストの内容に加えて、スライドの内容などを含めて出題し、60 分で解答できる内容を作成した。

4. 評価

小テストの平均点は 76 点であり、テストの難易度は妥当であった。最終テストの平均点は、86 点であり、多くの学生が優秀な成績を修めた。

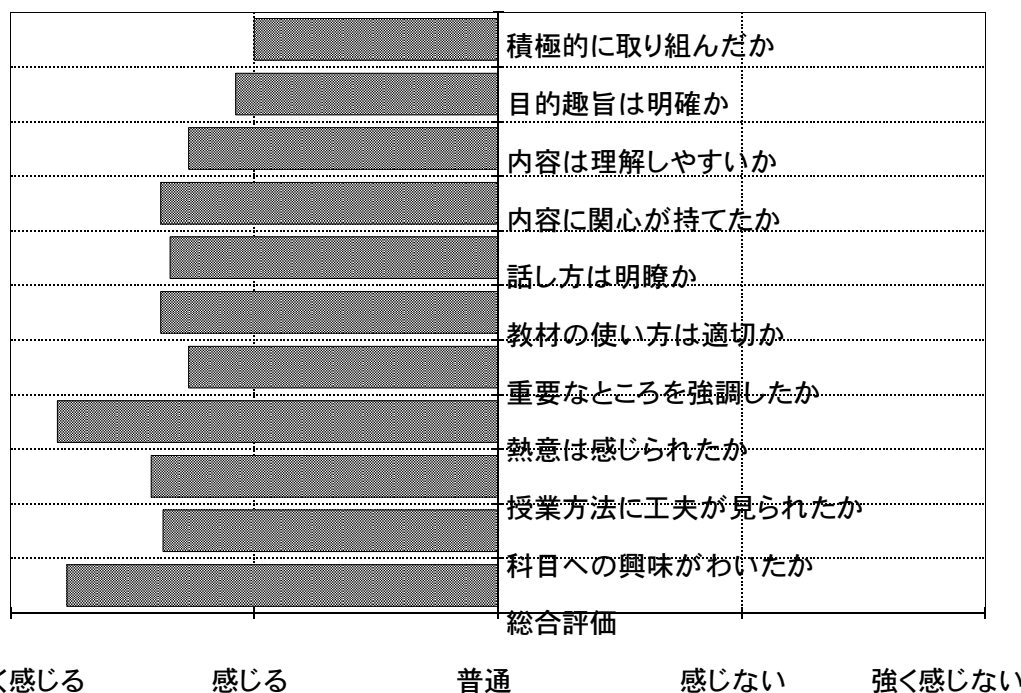
5. 学生による評価

実施したアンケートを図に示した。アンケートに付記された自由記述を下記に示す。

■自由記述

- ・毎回の小テストがあることで理解が深まり，良かった
- ・大変勉強になりました。受講して本当に良かったと思いました
- ・スライドの文字やテキストの文字が小さいときがあり，わかりにくかった
- ・配布されたプリントの内容が多すぎて，文字が小さい時がある
- ・1枚のスライドの文字が多すぎて，さらにメモを書き入れると復習の時に読み取れなくなってしまったので，もう少しスペースが欲しかった
- ・すごくわかりやすく，面白い授業だった
- ・小テストの内容が発達障害コースの学生には難しすぎるとたまに思う事があった。
- ・プリントの字が小さい

■アンケート項目



(対象：全受講者 26名)

図：受講者を対象としたアンケートの結果

- ・ホワイトボードに緑のペンで書くと，反射してまったく文字が見えないので黒のペンを使って欲しい
- ・いつも時間ぴったりに終わるのでびっくりしました。

6. 総合評価

昨年まで，指定教科書を読み進めていく進行だったが，今年度からパワーポイントを利用した授業方法に変更した。結果として，内容が精選され，より学習内容の重点が伝わったのではないかとと思われる。しかし，まだまだ文字が多く，スライドが見つらいとの意見が多く出た。教えなくてはならないとの思いが強く，重点ポイントがスライドからあふれるように文字になっていることは自分でも気になっていたが，従来の教科書を利用する方法に比べると，今以上に文字を減らすことに抵抗がないわけではない。

今後，スライドと資料の使い分けをいかにようにするかが課題になろうかと考えている。